

機関番号：32205

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：平成 20～22 年度

課題番号：20530781

研究課題名（和文）

若年無業者問題の複合的構成の解明とオルタナティブな支援観の構築に向けた総合的研究

研究課題名（英文）

Study of complex configurations of Unemployed Youth Issues and
Establishment of an alternative standpoint of Youth support

研究代表者

山尾貴則（YAMA0 Takanori）

作新学院大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：80343028

研究成果の概要（和文）：

研究成果は次の 3 点である。第 1 点として、若年無業者が社会生活から孤立化するメカニズムとそこからの回復のプロセスを明らかにしたことである。第 2 点に、日本各地の若年無業者支援の現状を調査し、若年無業者の孤立化からの回復にとって当事者間のコミュニケーションが有効であることを確認したことである。第 3 点に、韓国光州市における若者支援活動を調査し、若年無業者支援の国際比較という新たな研究テーマを得たことである。

研究成果の概要（英文）：

We got three findings. First, we found the process that youths recovered the isolation from social life and relationships to others. Second, we surveyed activities of youth support organizations in Japan. And we understood that communications between the participants was effective to recover from isolation. Third, we surveyed youth support activities at Gwangju in South Korea. And we started the research of international comparison of youth support.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
20 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
21 年度	700,000	210,000	910,000
22 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：若者支援，ニート，引きこもり

1. 研究開始当初の背景

わが国においてはすでに種々の若年無業者支援が実施されている。しかし、そうした諸支援の網の目からいわばこぼれ落ち、様々な問題を抱えつつも適切な支援を受けられ

ない人々が存在してもいる。本研究ではこの事実注目し、心理学および社会学の知見を活用しながら、彼らがどのような問題を抱えているのかを浮き彫りにし、適切な支援のあり方を明らかにする。

本田(2005)によれば、いわゆる若年無業者には就労への意欲はあるが結果として就労していない「不安定層」と就労への意志が乏しい「不活発層」に分類される。しかし申請者らは、「不活発層」は最初から不活発なのではなく、進路選択や就労という文脈との関係において何らかの心理的問題を抱え、その結果として「不活発」になっていると考えている。そうした心理的問題として、彼らには共通して、キャリアを重視する価値観を過剰に内面化した結果、それによって自身が排除されているという側面が認められる。つまり彼らの意識としては「不安定層」と同じ文脈に属しているが、状態としては「不活発層」に属している。

申請者らは、このような「不活発層」にある若年無業者の実態と、「不活発層」へと自らを排除していくメカニズムを明らかにする。それに加えて彼らを支援する枠組みについて模索する。

2. 研究の目的

以上の問題意識の下に、我々は3つの研究目的を設定した。第一に、すでに先行的に着手している栃木県近郊の若者自立支援実践についての調査研究をさらに展開することである。

その際申請者らはそれぞれの実践について個別に評価を行うだけではなく、諸実践が相互に連携しつつ若者を支えるネットワークを構築するための枠組みを構築することをも課題とした。

第二に、個別の心理カウンセリングや若者ミーティングにおける若年無業者たちとの語りを通して、彼らのライフコースやアイデンティティ形成の過程に見られる特質、抱えている困難の内実等を明らかにし、それを

ふまえて、不活発層に特有の(諸)問題を浮き彫りにすることである。

第三に、若者ミーティングという場そのものがいかなる意味ないし機能を持ちうるのか、あるいはどのような場として利用者とスタッフとの相互作用を通して共同構築されていくのか等、いわば不活発層にとって必要な場の姿とその形成過程を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は大きく分けて三つのプログラムからなる。一つめは、「とちぎ若者サポートステーション(サポステ)」が実施し、申請者らが運営を任されている「若者ミーティング」の研究である。申請者らは1. 当事者と援助者との個別的なつながり、2. 悩みを共有できる仲間とのつながり、3. 実際的な就労へのガイダンスという3方面からの援助を有機的に連動させていくことが必要であると考えているが、「若者ミーティング」がそうした場となりうるための諸条件や課題について、援助実践を通して考えていく。

また上記のプログラムと関連して、二つめに、臨床心理士である申請チームの一人がサポステにおいて現在行っている若年無業者(多くは「若者ミーティング」参加者でもある)を対象とした心理カウンセリングを通して、彼らの心理的問題に対して理解と援助を行いつつ、それらの問題の社会的文脈を明らかにしていく。

三つめは先行的に調査を開始している栃木県内の若者の自立を支援する組織の調査である。各組織の実践を支える支援観は多様であり、その背景に若者の問題を捉える上での社会的文脈の多様性が存在することが明らかになっている。そこで諸組織への調査を継続し、それぞれの組織の特質をより深く理

解する。

4. 研究成果

(1) 栃木県内の若者支援活動のサーベイ

栃木県内の若者支援活動が抱える課題やその克服のための工夫などについては、必ずしも十分に調査することができなかった。その理由としては、われわれの調査目的を必ずしも十分には説明することができず、調査時に齟齬が生じる場合が見られたこと、県内の諸活動においてその活動が終了してしまう例があったこと等があげられる。

(2) 各地の若者サポートステーションの実践の調査

日本各地で展開されている若者支援活動においてどのような工夫がなされ、また課題が浮上しているかを調査した。

① 長崎サポートステーション調査

調査期日：2009年3月8日～10日

調査対象：長崎県長崎市 長崎若者サポートステーション代表 浜民夫氏

調査概要：

長崎若者サポートステーションは2007年5月に設立された地域若者サポートステーションである。長崎サポステの事業概要は以下の通りである。

相談事業

代表等による保護者・本人等との面談会

臨床心理士による相談会

キャリアカウンセラーによる個別指導

高校中退者など学校生活に悩みのある人

のための何でも相談会

イベント等

若者の集い

若者交流事業

共同作業

トランプゲーム、ビジネスゲーム

野外活動、野外スポーツ

合同合宿

ジョブ倶楽部事業

家族・保護者交流会・セミナー

ジョブトレーニング事業

若者の自立支援に関する団体等との連携事業

その中でも我々が注目したのは「若者の集い」というプログラムである。長崎サポステのウェブサイトによれば、その趣旨は「若者の居場所」を提供することである。我々はすでに「若者ミーティング」というプログラムをスタートさせていたが、その活動と類似する部分が多く、「若者ミーティング」運営の参考になると判断し、代表の浜氏の聞き取りを行うことを決定した。

聞き取りにおいては、浜氏がサポステ事業に関わるようになるまでのライフヒストリー、長崎サポステの設立経緯、運営上の工夫や課題、今後の活動の方向性等をお話いただいた。

浜氏がサポステ事業に携わる前には、長崎大学の教員を長らくつとめていた。そのキャリアの中で、大学生のメンタルサポートを続けており、それがサポステ事業を開始するきっかけとなっている。

若者の集いに関しては、コンスタントに利用者がいるとのことである。またこのプログラムをベースとして、利用者同士が自発的に交流するという動きも生まれている。2009年3月当時、我々が実施している「若者ミーテ

ィング」においては必ずしも利用者同士の自発的な交流は活発ではなかったが、若者の居場所作りを継続する中でそうした交流が発生することを、事例を通して理解することができた。

② さっぽろ若者サポートステーション調査

調査期日：2009年2月23日

調査対象：北海道札幌市 さっぽろ若者サポートステーション 穴澤義晴氏

調査概要：

さっぽろ若者サポートステーションは年月に設立された地域若者サポートステーションである。

さっぽろ若者サポートステーションの事業概要は以下の通りである。

相談事業

総合相談

イベント等

食談会

ワーカースペース

ワーカースファーム

ワーカースチャレンジ

ジョブトレーニング

在学時キャリアプログラム

青少年の就労意識動向の調査研究

就労意識に関するアンケート実施

さっぽろサポステでは以上のような各事業を実施し、若者支援を行っている。穴澤氏によれば、さっぽろサポステはもともと青年勤労福祉センターが直面した問題に対応する中で生まれたものである。青年勤労福祉センターの活動目的は、その名称が表すとおり、職業に就いている若者たちの学習会やレクリエーション等、勤労青年たちの相互交流を

支援することである。しかし、そうした若者たちが減少するに伴い、センターの利用も著しく低下した。そうした状況に対応すべくセンター活用のあり方を模索していたところ、引きこもりやニートといった、あらたな若者層の存在を発見することになった。そこで勤労福祉センターとしてそうした若者たちの支援をするべく、さっぽろサポステを立ち上げた。

さっぽろサポステの事業の中でも特に我々の関心を集めたのは食談会というプログラムである。

次に、さっぽろサポステの見学をすることを通して、サポステの施設が充実していることの重要性をあらためて確認した。すでに述べたようにさっぽろサポステの前身は勤労福祉センターである。そのため、さっぽろサポステの活動は体育館や調理室等が備わった総合施設において行われている。先に述べた食談会もそうした施設をフルに活用して行われている。このように、多様な活動を無理なく展開できることが、若者支援の実効性を高めていくと思われる。

当時、我々の活動はジョブカフェの施設に間借りする形で行われており、「若者ミーティング」もジョブカフェの待合スペースを使用していた。「若者ミーティング」自体は利用者たちに受け入れられ、利用者も増えたのだが、その反面、求職活動をしにジョブカフェに来所する若者たちの利用に多少なりとも影響を与えることになっていた。その点、さっぽろサポステは十分なスペースがあり、他に気兼ねすることなく活動を行える。このように、活動をスムーズかつ効果的に行うためのハード整備が必要であることがあらためて浮き彫りとなった。

③ 韓国光州広域市韓国光州広域市青少年総合相談センター調査

調査期日：2010年3月9日

調査対象：韓国光州広域市青少年総合相談センター パク・ビュンフン氏

調査概要：

韓国における若者支援は学業支援が中心である。この点については、日本以上に学歴が重視される韓国の特殊性が反映されているものと考えられる。すなわち、支援センターにおける支援活動の中心には、さまざまな事情により学校に通学することができなくなった若者たちに対する学習支援が存在する。

また、対人関係の困難やインターネット中毒等、さまざまな問題を抱えた若者たちに対する合宿プログラムも実施している。

さらに特筆すべきは、光州市民たちがサポーターとなって、自らの専門性を行かす形で若者支援に携わっている点である。すなわち、医師や弁護士などが若者支援活動に参加しているが、その専門技能を活かし、無償で相談活動等を受け持っている。センターのスタッフたちにおいても、パク氏をはじめとして、すべて修士課程修了以上であり、高度な専門性を備えている。

このように、韓国における若者支援活動は専門性の高さが特徴となっている。

(3) 若者ミーティングの実践と参与観察

若者ミーティングの実践と参与観察については、十分に実施することができた。月に1, 2回のペースで活動を実践する中で、若者たちが変化していく様子をつぶさに観察することができた。

若者ミーティングの利用者たちには、自己

肯定感の著しい欠如という特質が共通して見られる。このような自己認識のあり方は、A. ホネットの言葉を借りるなら、「情緒的気づかい」の関係において獲得されるはずの「自己信頼」が著しく損なわれた状態である。他者との関係性の欠如状態が続くなかで、彼らの自己信頼は切り崩されている。

また、彼らの多くがいじめ等を経験し、それがトラウマとなっている。だが皮肉にもそれが彼らの自己を構成する最も重要な要素となっている。また彼らはちょっとした常識を知らないなど、露見すると困る秘密すなわちスティグマを持っている。彼らはそれを隠そうと“普通”を装うが、無難に過ごすことに腐心するあまり自己開示を避け無表情に生きざるを得なくなっている。

このような状態にある参加者たちへの聞き取りを通して、彼らが若者ミーティングへの参加を通して他者と関わり、傷ついた自己信頼を互いに回復し、互いを承認する機会を得ていることが明らかになった。

さらに参加者たちはそうした相互の承認をベースとして、“自らの自己を脅かされることはないがどこかあっさりとした関係”から、より深い関係を求めはじめてもいることも明らかになった。

(4) 若者支援活動の国際比較

研究を進める中で、韓国光州市における若者支援活動の実践者と知己を得、韓国における若者支援活動を見学することができた。そのことにより若者支援活動における国際比較をすることが可能となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 山尾貴則, 2011, 「地域若者サポートステーションにおける若者支援活動の特質—とちぎ若者サポートステーションスタッフへの聞き取りから—」, 『作大論集1』, 作新学院大学, 251-267, 査読無.
2. 山尾貴則, 2009, 「A. ホネット承認論の検討—規範的社会理論から経験科学へ—」, 『作新学院大学人間文化学部紀要7』, 3-23, 査読無.
3. 村澤和多里・山尾貴則, 2009, 「若者たちの「孤立化」と「回復」をめぐる—地域若者サポートステーションの取り組みを通して考える—」, 『生活指導研究26』, 79-99, 査読有.

[学会発表] (計5件)

1. 村澤和多里, 2008年4月20日, 「A県における若者就労支援枠組みの模索」, 心理科学研究会, 愛知県犬山市.
2. 村澤和多里, 2008年9月7日, 「働くことと若者の自立支援—若者サポートステーションの取り組みをとおして考える—」, 日本生活指導学会, 北九州市立大学.
3. 村澤和多里, 2008年10月25日, 「栃木県の若者自立支援の現状と課題—若者の心理に触れながら—」, 若者自立実践検討会, 北海道大学.
4. 山尾貴則・村澤和多里, 2009年10月11日, 「就労「以前」の若者が抱える問題の把握へ向けて—Aサポステにおける活動実践を手がかりに—」, 第82回日本

社会学会大会, 立教大学.

5. 村澤和多里, 2010年2月24日, 「韓国における自立基盤喪失青少年の実態と自立支援方案」へのコメント(指定討論者として招待されておこなったもの), 第1回日韓若者(青少年)自立支援検討共同シンポジウム, 北海道大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山尾貴則 (YAMA0 Takanori)
作新学院大学・人間文化学部・准教授
研究者番号: 80343028

(2) 研究分担者

村澤和多里 (MURASAWA Watari)
作新学院大学・人間文化学部・准教授
研究者番号: 80383090

(3) 連携研究者

なし